

2015 年 9 月 12 日 (土)

富山県民会館 611 号室

14:00~15:30

## 「海舟が見た環日本海地域」

大妻女子大学比較文化学部教授

上垣外 憲一 氏

### 1. はじめに

私は昨年 12 月、中公新書から『勝海舟と幕末外交』という本を出版した。10 年近く前から構想を温めて、約 2 年をかけて調べ書いたものである。勝海舟は日韓関係あるいは日中関係、日露関係について、明治の他の政治家と全く異なる面白いことを言っている。また、海舟は体制派だが、薩長藩閥政府とは外交について全く違う考え方を持っていた。海舟の語録に『氷川清話』がある。日清戦争中も海舟は中国と戦ってはいけないと盛んに言っていたので、新聞記者が彼を訪ねて、反時流の論法を口実筆記として書き留めたものである。尖閣諸島の問題で日中関係が急に険しくなったとき、読み直してみたところ、今もあてはまるものがたくさんあって、あらためて海舟は偉い人だと思った。函館や長崎などいろいろな所に資料を探しにも出かけたが、長崎では、戦艦武蔵を建造したことで有名な三菱重工業の長崎造船所を訪ねたが、その前身は海舟が学んだ長崎海軍伝習所と同じ時期に着工された長崎製鉄所である。製鉄所といっても、鉄を作る製鉄所ではなく、工作機械で、鉄の材料を加工して、機械や船、蒸気機関などを造るところであったので、今風に言っても海軍工廠で、それが発展したのが三菱重工の長崎造船所である。



海舟が長崎海軍伝習所で学んだのは、ペリーが来航した 2 年後の 1855 年 (安政 2 年) である。海舟は江戸の生まれで、幕府の御家人ではあったが、最下層の小普請組の貧しい家で、一生懸命学問して、特に蘭学をしっかりと勉強したことで、出世の糸口が開けたのである。当時、開国したといっても外国人が日本中どこにでも入れる状態ではなく、時の老中であった阿部正弘の発案で、長崎にオランダ人の先生を呼んで、海軍伝習所をつくったのである。咸臨丸は、伝習所の練習船としてオランダで建造され、アフリカの南端を回ってのはるばる日本までやって来た。のちに海舟が艦長として太平洋を横断したのは、有名な話である。『氷川清話』には、海舟が長崎から練習航海でオランダ人の教官と一緒に対馬へ行ったことが書かれている。海舟が咸臨丸でアメリカへ行ったのは 1860 年 (万延元年) であるが、その間に桜田門外の変が起きて井伊直弼が殺されてしまい、その翌年、対馬をめぐる大事件が起こった。

## 2. 露英の対立（クリミア戦争）

対馬がイギリスとロシアの争いの場所になった要因は、今なお日本海をめぐる軍事・政治問題の基本である。ウラジオストクがロシア領と確定したのは 1860 年で、その後、急速に開発が進められ、ロシアの極東地域の最重要基地になったが、それ以前はアムール川河口にあるニコラエフスクに海軍の基地が置かれ、ロシアの極東総督（シベリア総督）が着任していた。

ウラジオストクがロシア領になる直前の 1854～56 年ごろにクリミア戦争が起きている。クリミア戦争はクリミア半島だけで起きたことだと思われがちだが、実はロシア帝国と大英帝国の争いであり、世界中で戦闘が起こる可能性があった。極東地域では、カムチャツカ半島のペトロパブロフスクにあるロシア海軍の基地を、イギリスとフランスの艦隊が攻めたがロシアが守り切った。クリミア半島では、英仏軍が、セバストーポリにロシアが築いた要塞を多大な犠牲を出したが陥落させた。ロシアは西で負けて東で勝ち、クリミアから黒海に向けて進出することが難しくなったため、ニコラエフスクからさらに南への進出を考えた。ロシアは日露戦争の直前からではなく、1855 年ごろから極東に海軍を集結させ、力を入れていたのである。

## 3. 露英の対立（アロー戦争）

函館は、日本が開国して最初に開いた港の一つだが、ロシアの本拠地であるニコラエフスクから近かったため、圧倒的にロシア船の寄港が多く、ロシアは江戸ではなく、箱館に外交公館を置いた。現在、函館港に展示されている箱館丸は、日本で建造された最も古い西洋式帆船の一つで、ニコラエフスクまで航海していた。勢力圏を南方に伸ばしたかったロシアにとって、箱館～ニコラエフスクは重要な航路で、中国の中央部に向けて南下するためには、間宮海峡を通る必要から、日露和親条約で樺太を日本とロシアの共有と取り決めて国境線を引かなかったのである。

クリミア戦争でロシアに勝利したイギリス・フランス連合軍は、次にアロー戦争（第二次アヘン戦争）を起こし、いったん天津条約が結ばれたが、その後、天津から北京へ進撃し首都・北京を占領した。清朝政府は、やむなく英仏に譲歩して、1860 年に北京条約を結んだが、このとき、ロシアは自らは戦争せずに英仏と中国の戦争に介入し、英仏に対してある程度中国に譲歩させ、中国には中国を助けたのだからと、その見返りとしてロシア沿海州を領土として確定させたのである。これには、イギリスが怒ったが、結構な損害を出して、北京まで攻めて占領したにもかかわらず、自分たちは大した領土を得ることができず、ロシアは戦わずして広大な領土を得たのだから当然のことだろう。

## 4. ロシア外交の特徴

ロシアは、軍事力で強引に領土を奪うばかりでもなく、外交も意外とうまいのである。アメリカのペリーは幕府の言うことを聞き入れず浦賀に来航したが、ロシアの方は友好的

で、幕府の言うことを聞いて長崎で交渉するなど、日本側の要求を受け入れた。当時はクリミア戦争の直前で、ロシアとしては、日本を占領するような力もなく、なるべく日本と友好的にして、イギリスと戦争になったとしてもロシア船が日本の港に入れるようにと考えてのことであろう。また、海舟は、長崎でオランダ人の教官から、「セポイの反乱は、ロシアがムガル皇帝などに賄賂をつかませて、反乱を起こすように扇動したものだ」と聞いたと言っている。今でも定説ではないと思うが、あり得る話である。また別に海舟は、「ロシアの企図の遠大なことには驚く」と言っている。ロシア革命が起きてロシア帝国が崩壊したときも、沿海州はロシアから離れなかった。ウラジオストクに行くと、ロシアはどんなことがあっても絶対に太平洋に出ていけるこの地域を手放さないという決意を持っていたことがよく分かる。中国に近い観光地であるにもかかわらず、中国人が異常に少ないのだ。中国人が入ってきて中国領に戻るのを、極度に恐れていたことがひしひしと感じられる。

## 5. ポサドニック号事件前夜

アクテイオン号というイギリスの測量艦が、1859年、日本海を航行している。その記録を読むと、アクテイオン号はウラジオストクにも行っており、現在のピョートル大帝湾をヴィクトリア湾と名付けていたが、その後、1860年にロシアの領土になったことで、ロシアの軍艦が測量し直して、湾の名前も変えて、現在に至っているのである。1860年ごろ、イギリスの軍艦が極東に入ってきて測量し、ロシアも巻き返しに出たということである。アロー戦争のときは大連などにも行っており、旅順に、**Port Arthur** という英語名があるのは、イギリス軍艦が、事実上占領して基地として使っていたからである。渤海湾は、イギリスの領海のようになっていた。その後、日清戦争で、日本は遼東半島を得たが、ロシアが介入したため、仕方なく中国に返すことになった。日本人は非常に怒ったが、ロシアからすれば、大連も旅順もイギリス人が先に占領し、わが物顔で軍事基地として使っていたところであり、中国に対してロシアは、「私が助けたから取り返すことができた。だからお礼に遼東半島の一部である大連と旅順を貸してほしい」と交渉したのだろう。中国がお礼としてロシアに譲ってくれたので、ロシアが直接、日本から取ったわけではないという論理である。日本から見れば、このロシア側の論理は正しいとは思わないし、イギリスと同じくらい勝手だと思えるけれども、それが幕末期の日本海のありようだったわけである。

## 6. ポサドニック号事件

海舟は、『勝海舟全集』にも収載されている「伝習以来魯国之事」で、長崎製鉄所でロシア海軍の士官と付き合いがあったと言っている。ロシア軍艦アスコルド号が東シナ海を航行中に台風に遭い、長崎で修理することになったため、オランダ人技術者や、日本人の船大工や幕府も協力して助けるという出来事があり、海舟はこのとき、ロシアの軍人と親しくなったという。また、海舟は、自分是对馬のポサドニック号事件（対馬事件）に関わっ

たと言っている。ロシア軍艦のポサドニック号は、文久元年（1861年）突然、対馬にやって来て占拠し、兵舎や砲台を築き始めた。対馬藩は、条約で決まっている開港場所は長崎、函館、神奈川だけだと主張したが、ロシア側は「台風で船が傷んだので修理しているところだ。病人もいるから何とかとどまらせてもらいたい」と、どんどん兵舎を建て、軍事基地をつくっていった。それで、大問題になったのである。

初代駐日イギリス公使のオールコックは天津のイギリス東洋艦隊を呼び、いったん江戸に来て、当時の老中安藤信正と会談した。そして、天津にあったイギリス東洋艦隊の司令官、ホープ中將が2隻の軍艦を率いて対馬へ行き、ロシア軍艦と直談判したのである。これでロシアの軍艦は退散した。ただ、ロシアには、イギリスが先に手を出していたではないかという言い分があった。1861年にポサドニック号が占拠したが、2年前の1859年秋には、ウラジオストクなどを測量したアクテオン号が対馬に来て居座っていた。学会ではまだ完全に確定したことではないが、最初に対馬の測量をしたのはイギリス軍艦だったという説である。対馬はリアス式で海岸の出入りが非常に多く、湾が深く入り込んでいる。運河が切り開かれた浅茅湾はとても深い湾で、3000トン級の軍艦までは安全に停泊できる。対馬は辺境の地で貿易にはあまり向かないが、1860年当時の世界の海軍の水準からすると、理想的な軍港だったのである。浅茅湾を測量し、軍事基地としては最良であることを発見したのは、実はイギリスだったのである。

ここにイギリスの軍事基地がつくられたら手も足も出ない。クリミア戦争のようなことが再来したら、ニコラエフスクやウラジオストクにいるロシア軍艦はここを通ることができなくなるので、ロシアは焦ったのである。因みに、日露戦争のときは、バルチック艦隊は南から通って、対馬近海で激戦になった。ロシアではその戦いを日本海海戦とはいっておらず、場所からいっても、私は対馬海戦と呼んだ方がいいと思う。

海舟がどのようにポサドニック号事件に関わったかはとても複雑だが、海舟は幕府の軍艦でイギリス軍艦と一緒に行って、下交渉ぐらいはしたのではないかと私は思っている。幕府の軍艦は多分、蟠竜丸と呼ばれるヴィクトリア女王の搭乗船で、遊びのためのヨットだが、大砲も積める船である。本交渉では、日本が表に出るのではなく、イギリスが「ロシアがここを占拠するのはけしからん」と直談判した。ポサドニック号はそれほど大きい船ではなく、イギリス軍艦の方がはるかに大きいし、背後の天津や上海には東洋艦隊がいるので、さすがにロシアも折れて退散したわけである。ただ、私は、イギリスがただで協力するはずはないと考える。イギリス公使のオールコックやホープ中將は、もしロシアを退散させたら、ここをイギリスに貸してくれないかという話はしたと思う。

## 7. おわりに

今日、アジアにおけるイギリスの役割をアメリカが受け継いだのは事実である。例えばアフガニスタンは、今は米英軍と一緒にあってゲリラと戦っているが、もともとイギリスとロシアが争っていた場所である。チベットが問題になるのも、今は中国領のようになって

ているが、イギリスが中国に進出していく上で、チベットはインドから入っていく一つの道筋で、イギリスには、インドとのつながりで、自分たちの勢力圏だという気持ちがあるからである。それをアメリカが引き継いでいるわけで、チベットは単なる民族問題ではなく、世界の超大国の力がせめぎ合う場所なのである。こうしたクリミア戦争時代からの米英とロシアの争いの図式を頭に入れておかないと、アジアの問題でも分からないことはたくさんあると思う。

また、日本海について考える際には、軍事的問題を抜きにすることはできない。私は京都に 10 年住んでいたので舞鶴の海でよく泳いだが、日本海は非常に美しい海だと思う。だから、軍事や原子力潜水艦の話はあまりしたくないが、考えないわけにはいかない。ロシアや中国、韓国、北朝鮮との関係を考える上では、ただ平和が大事だと言っているわけにはいかず、基本になる軍事や政治のバランスが分かっていると、本当に意味のある解決策を見つけることができないと思う。そういう図式は、日本が近代に入る直前、幕末期には始まっており、日本海においていろいろな勢力が接する状況も、1850 年ごろには始まっているのである。さらに、ロシア人はウラジオストクなどの地域に対して深い思い入れを持っている。中国人から見れば辺境の地だが、ロシア人にとっては温かく、海に面した素晴らしい所である。そういうことも考え合わせて、日本海のことを考えられたらと思う。

#### **質疑応答：海舟であれば日露戦争にどのように対応したと考えられるか。**

海舟は日露戦争が具体的にになる前に亡くなっている。ただし、日英同盟を結ぶ話には、日英同盟はロシアを敵国と考えてロシアと戦うために結ぶ同盟だから、それはいけないと言ったと思う。海舟は、江戸城の無血開城で分かるように戦わない將軍で、軍事総裁になっても、西郷隆盛との間で平和交渉をまとめてしまう人である。剣術は非常に名人で戦えば強かっただろうと思うが、戦争状態になることが嫌いな人だったようで、死ぬのが怖いという人ではなかったと思うが、本質的に平和主義者だったのだと思う。

海舟が一番反対したのは日清戦争である。中国と争うのは日本にとって不利だと、しきりに言っている。伊藤博文にも、「ロシアが出てくることになるではないか」と言っていた。つまり、漁夫の利で、日本と中国が争えば得をするのはロシアである。三国干渉があった後、自分は戦争をしていないのに、あれだけの領土を取ってしまった。日本と中国が争って、両国ともへとへとになった状態のときにロシアが干渉してきたので手も足も出なかったのだが、そんなことは戦争を始める前から分かっていたことではないか。漁夫の利をせしめたロシアが憎いというのは、自分がミスをして取られたものをロシアのせいになっているにすぎない。そもそもロシア人を敵と見るのが間違っている。海舟はきっとそう言ったと思う。日本と中国、韓国が同盟を組んで、イギリスやロシアなどの西洋列強がアジアに侵略してくるのを防衛しようというのが、海舟の幕末からの構想だったのである。

幕府の海軍を海舟がかなり掌握していると思われていたとき、木戸孝允（桂小五郎）が対馬の重要人物と 2 人で会いに来て海舟に話したのは、対馬を基地として朝鮮を抑え、で

できれば取ってしまおうという構想である。海舟は、日本と中国が手を組むためには朝鮮との間も平和でなければならないとして、その提案を退けたのである。

長州藩は対馬のすぐ近くで、非常に親しい関係にある。その親しい対馬を海軍の基地にするとイギリスもロシアも言っている。そこで、日本の海軍基地にして、朝鮮、アジアへ進出するというのが、吉田松陰の構想である。吉田松陰は長州の人で、対馬に近い所の人だったので、そのような構想を立てたのだろう。明治の長州閥は基本的に大陸進出路線になっていくが、海舟はそれに反対していた。朝鮮を戦場として日清戦争を戦うことには反対だったのである。中国との関係が決定的に悪くなってしまっていて、日中が協力してロシアから満州を守れなくなってしまうからである。中国の得になるからではなく、日中が争うことでロシアやイギリスの進出の機会を与えることになるから反対したのである。

ただ、日清戦争が終わり、ロシアが大連や旅順を取っている状態で「絶対に戦ってはいけない」と海舟が言ったかどうかまでは自信がない。ただ、旅順を取られて日本人が怒っているのは、自分が外交下手なのをごまかすためだということは平気で言ったと思う。伊藤は、そう言われてかなり反省したと思う。下関条約では相手を追い詰め過ぎて取り過ぎたため、周りから日本は取り過ぎだと言われて返させられた。だから、下関条約は失敗だったと伊藤は思っていたと思う。その後、彼は日中親善論に考えを変える。

また、伊藤は日露戦争に反対した。1902年に日英同盟を結ぶとき、伊藤は「自分がサンクトペテルブルクまで行って、ロシアと直接交渉して話をまとめるから、同盟を結ぶのは待て」と言って、実際にサンクトペテルブルクまで行っている。開戦のときには「自分は一兵卒になって戦う」と言ったが、日露戦争に進むことには反対していたのである。特に日英同盟を結ぶことには、伊藤ははっきりと反対だった。それには勝海舟の外交思想の影響があったと思う。